

# 『方言心理学』おぼえ書き

藤原与一

## はじめに

私がかねて、言語学は言語社会学と言語心理学との二体に分析される、と考えてきた。この考察にしたがって方言研究を推進する時は、方言学のためにも、方言社会学と方言心理学との二体がうちたてられることになる。——（学の側面的な処理でもある。）

どちらかといえば、私の中には、方言社会学が、より早くかたちをなした。さて、近来しきりに胸中を往来する思考は、方言心理学についてのものである。いずれにもせよ、私は、これら二体の学を、「人間の学としての方言学」の実践として、まとめていきたく考えるものである。

かえりみれば、私に、「民間の言語心理」(『文学』VOL. 25 1957 2)との旧文がある。これは、私にとっての、自覚もおぼめかしいころの「社会心理学」的所産であった。

テーマ「方言心理学」

私の設定する方言心理学は、言うまでもなく、方言心理の学である。このばあい、方言という述語にも心理という述語にもかたよらないで、方言心理という述語に、私は、一個のウエイトをおきたい。方言心理は、言うまでもなく、社会的なものである。

期するところの方言心理学は、方言生活の心理学である。言いかえれば、方言生活の研究の（方言学の）心理学的側面を言おうとするものである。これを心理学的方言学サイコダイアレクトロシとも称することができる。

方言生活の心理学ゆえ、これは、いわゆる言語心理学の範疇を超えて、社会心理学的である。

方言社会学、すなわち方言生活の社会学は、方言生活の研究の（方言学の）社会学的側面をねらうものである。これは、社会学的方言学ソシオダイアレクトロシと称することができる。

方言生活（↓言語生活）は、生活行動にはかならない。私どもは、日ごろ、方言生活の研究にしたがって、言語行動学を実践している。（「言語と行動」という思考方式は、すでに、私どもにも無用である。）言語行動は、もとより、社会においておこなわれるものである。したがって、言語行動学は、広義の社会行動学の内にあるものとされる。（注。南博氏の『社会心理学入門』には、「そうして、そのような全体社会の規模で社会行動を分析する学問は、社会行動学とよぶのがふさわしい総合的な共同研究の分野である。」とある。）私はいま、そのような言語行動学の中の方言心理学をまとめようとする。方言心理学と方言社会学との契合もまた、ここに明らかである。

## 方 法

方言心理学は、「社会心理学としての方言心理学」と規定することができる。方言心理学の方法とされるものは、言うまでもなく、社会心理学の方法であろう。

私は、いわゆる心理学の専門学徒ではない。しかしながら、方言研究にしたがつて、方言社会の方言生活にふれ、ここに追究の歩を進めて、いわば、方言心理の世界にあそんできた。端的に言って、私どもの方言調査は、社会心理学的作業だったのである。なんと久しく、社会心理学という述語をおき忘れてきたことか。

研究史によるのに、William McDougall は、一九〇八年に、"An introduction to social psychology" を発表している。

社会心理学とは何か。その道の人は、社会心理は、「人間の社会行動の心理」であると言う。社会心理は、集団、社会の持つならかのものが、個人の行動におよぼす影響である、などとも言われている。社会心理学は、「人間の行動を社会関係の中で（もとで）研究する。」ものであるという。知友の示した簡潔な定義は、「社会心理学は、人間の社会的な行動を研究するもの。」というのである。

私どもは、こういう定義を聞いて、一面、むしろおどろく。人間社会の人間の行動に、非社会的なものがあるうか。旧来の、修飾ぬきの「心理学」もまた、人間の行動の心理を問題にするばあい、もちろん、社会的な行動を問題にしてきたのではなかったか。近年、「社会心理学」の言われることがつよいけれども、思うのに、これは、けっして個人心理学から隔絶されたものではない。現に、多くの社会心理学者は、その実験と調査とで、ずいぶん多く、個人心理ベースのしごとをしている。

社会心理学と個人心理学との相即は、自明であろう。私の、いささかの経験をもってしても、つぎのことが言える。社会心理学が樹立されて、それまでの個人心理学的作業が、多く、社会心理学化された。(社会心理学の名のもとにおかれた。) 社会心理学と個人心理学との相即には、ラングとパロールとの相即を思わせるものがある。

私は、求めるところの方言心理学にあって、社会心理学と個人心理学との相即の考えられる社会心理学を、方法とする。これまた、自明のことであろう。

二・三の例説にしたがう。文法ないし表現法は、すでに法の名をこうむっているのにも明らかなおと、社会心理学の対象である。ところで、表現法をふまえるものに、表現がある。前者は一般的であり、後者は個別的である。表現を直接の対象とするものは個人心理学であろう。個人心理学と社会心理学との相即は、表現と表現法との相即に、さも似ている。つぎに、音韻は、社会心理学の対象である。音声は、個人心理学の対象にはかならない。社会心理学と個人心理学との相即にも等しく、音韻と音声との関係が、相即的である。造語法は、これまた法の名に明らかなおと、社会心理学の対象になる。人の泣くまねを語にまとめて、「ナキマネ」というのがつくられているが、これは、「動詞連用形十名詞一」の造語法を示すものである。ところで、一人の幼児が、おとなの「ナキマネ」という語を聞いて、なんのひょうしでか、「マネ」に「豆」を思い、「ナキマネ」を「ナキマメ」と言いあらわしたとすれば、この時の「ナキマメ」は、明白な個人創作であって、いわば、個人心理学の対象である。造語の個人創作と造語法との相即もまた、個人心理学と社会心理学との相即に対応する。

## 作 業

方言心理学のために、私は、種々の調査作業をおこなう。

言ってみれば、私どもは、すでに、長年月、こうした作業を実施してきた。地方に旅し、それこれの村落にはいって、土地人士の間に起居し、私どもは、そこそこで、多くの方言心理を経験してきた。——じっさいには、その方言心理のやどるものを、すなわち方言事実を、かぎりもなくとりあげてきた。

社会心理学者は、ことに、心理学的方向の（社会学的方向ではなく）社会心理学者は、いわゆる実証主義を重んじる。実験と調査が、その人たちの生命である。その線にしたがって言うならば、私どもは、実験というよりも、調査その

ことを旨としてきたものである。今後も、これにかわりがないであろう。

機械実験の方法を無視するものではない。しかし、ドイツでおこなわれた機械実験主義の方言調査の轍は、踏みたくない。方言心理の把握を目的とするからである。

作業の領野は、どのように見わけられるであろうか。今は、単純に考えても、まず表現法事象の領域がとりたてられる。観察を替え、局面をとりなおせば、たとえば方言意識の領野がとりあげられる。この領域の中が、また細分される。要するに、作業領域の分析は、つぎに述べる学体系に対応してなされるはずのものである。

作業に関して考慮すべきは、把握の深みである。私は、方言心理学の名において、できるだけ深切に、方言生活の、社会心理学的な現実をとらえたいと考えるものである。

心理は、すべて、人間生活の深奥を示すものであろう。私も、方言学徒として、方言生活の社会心理学的な解明にしたがい、できれば、深到の追究・把握に成功したい。

## 学 体 系

ここには、一書の発表を想定して、学体系を、いわゆる目次のかたちで述べてみる。

### 目 次

はしがき 方言研究の心理学的見地

第一章 方言社会の方言心理

第二章 社会意志

社会意志は、社会心理に属する。

社会意志は、「方言心理の社会」の内質をなす。

方言社会での社会意志のはたらきを分析すれば、次下のような心理把握が可能であるか。

その一 社会生活のやや公的な——いわば責任生活の——方向を見る

「家」の心理

協同の心理

孤行の心理（閉鎖の心理）

「世話をやく」の心理

つとめ・義理の心理

守株の心理

模倣の心理

不寛容・排他の心理

掣肘の心理

もとより、これらの心理を、方言生活に即して、具体的に説明していききたい。しかも、その説明が、深みを持つようになりたい。たとえば掣肘の心理をとりあげても、これは、人倫語彙の下向性の指摘などによって精説したいものである。

その二 社会生活の多少とも私的な——いわば無責任生活の——方向を見る

交際・つきあいの心理

「ふうがわるい」の心理（「人目」の心理）

噂（社会連帯の一種）・評判の心理

嘘の心理（はなはだ対他的なもの）

嫉妬の心理

憎悪の心理

侮蔑の心理

諷刺の心理

滑稽の心理

娯楽の心理

無造作工夫の心理

旅人（お遍路さん、遊芸の人など）をむかえる心理

旅出（もの参りなど）の心理

もとより、これらの心理把握は、方言生活そのものの描写による。たとえば娯楽の心理についても、私どもは、民間歌謡の即興性などを実証して、その心理を深く追究することができる。

### 第三章 方言意識と方言圏

社会意志の一態として、方言意識をとりたてる。方言社会に方言意識がある。

#### 1 方言圏の大小

#### 2 方言生活圏

以下、汎社会的な見地で。「」どの社会にあっても」との心である。あるいは、「なんらかの社会で」との心である。

#### 第四章 表現法の心理

これは、かたんに、語法の心理あるいは文法の心理と言ってもよく、また、おもむきをかえて、発想の心理と言ってもよい。文法上の命令形などは、たちまち好個の問題になるであろう。とりわけ重要な問題とされるのは、待遇表現法である。あるいは、広く言つて、婉曲表現法である。一例をあげてみる。愛知県尾張西部の一地で経験したことである。一中年婦人は、私の「どうもごちそうさまでございました。」とのあいさつに対して、「オムツカシュー ゴザイマシテ。」と返事のあいさつをした。この婦人はまた、夕食後、お膳を下げにきて、つぎの間で、「エライ オムツカシュー ゴザイマシテ。」と、ていねいにあいさつした。つぎに、この家を辞去するさいのことである。私の礼辭に答えて、当家の主人は、「オムツカシュー ゴザイマシタ。」とあいさつした。これらに見える「オムツカシュー」は、私どもに、深い探究を要求してやまない。方言心理学の最大の研究課題の一つは、待遇心理であるとも言えようか。

特異な表現法の一々に、所定の言語心理があることも、また明らかであろう。

#### 第五章 音韻の心理

ただちに思いおこされるのは、柳田国男先生の説かれたN音効果である。これに加えて、M音効果もまた、重要視すべきではなからうか。日本人は、ことあるごとに、「マーマー」の発語をしている。なぜ、このように、「マー」が、頻用されているのか。与論島では、文表現の末尾に「ヒン」がつけられると、それは、目下に対する言いかたになるという。「ヤン」がつけられると、目上に対する言いかたになるという。「ヤン」音と「ヒン」音との、作用上の大差が目される。

音韻の心理と文法の心理とに関しては、先掲の「民間の言語心理」に、いくらかのことが述べてある。

## 第六章 語詞・語彙の心理

便所は、かつて「お閑所」とも言われた。今日の「お手洗い」という語も注目すべく、旧の「お手水」という語もまた注目すべきものである。総じては、生活の下卑の方向を見れば、そこに、語詞製作の心理の、きわめてあらわなうごきがあるのを、看取することができる。

それぞれの語彙分野に、相当数の語が、しぜんにとりそろえられている。その集合は、ただちに、私どもに語彙の心理のえぐりとりをうながすものである。生活部面による語彙の豊富と貧弱とがまた、注視すべきものである。

以下、総括の二章である。

## 第七章 地方性・風土性

### 1 民俗心理事態

### 2 地方的な好悪——風土性——

## 第八章 方言心理現象の特異性

——方言人その心理像——

△方言心理学と方言社会学との相即▽

以 上

広島大学社会心理学研究室の上野徳美氏は、社会心理学について、学史にもわたり、多くのことを教えてくださった。深く謝し、厚くお礼を申しあげる。

(五七・一・三)